



第二中学校区



おいらん観音

元祿年間、鐺石郷田島村仙右衛門親子三人連れで比角砂浜（今の護摩堂あたり）にお堂をたてて、石の地藏尊を安置して本尊とし、仏道に励み、念仏講を作り諸方を勧化（かんげ）していた。

兄を善鈴、妹を了観といつて近隣から敬愛される。地藏尊は北条村渡場の藪の中にあつたものである。

ある年、善鈴坊は西国三十三か所の観音菩薩の像をこの地に建立し奉ろうと発願（ほつがん）、江戸へ奉加の旅に出た。善鈴は江戸吉原のおいらん衆の悲しくもはかない女人の願いを観音の慈悲に托したいと思ひ、はじめひやかしわらいを受けながらも、吉原の街で現世利益の信仰を説き、勸進の行を続けた。十六番まで勸進できたが本願なれば病にたおれ、享保二十一年三月十三日、その地で没した。

縁あつて善鈴坊の従者になつていた頸城郡出身の屋根ふき職人はその教化に浴し、師の大願が空しく消え去ることを嘆き、罪障消除（ざいしょうしょうじょ）の好機縁と髪をそり、名を善志坊と改め、師の意を継いで奉加を続けた。吉原のおいらんをはじめ、人々はその志を奇特として喜んで施主となり、大願は見事に成就した。

奉加を受けた三十三体の観音像と師善鈴坊の入手していた阿彌陀仏を持つて帰柏、地藏堂に安置した。

三代住職の時、浜風による飛砂を避けて現位置に移った。

白竜さま (その一)

比角村鼠塘（ねずみどう）の北隅、畑の中にたも木の老樹があつた。樹中に空洞となつているところがあつて、こうもりの住みかとなつていた。ここにどこから来たのか一匹の白頭の蛇が住みつき、晴天の日は、空洞からはいでて、付近で遊ぶが別に害を加えるようなこともない。

けれども、この木のある付近を荒らすと、その人はきまつて眼病を煩つて片目になつてしまふ。それでこの附近にすが目となる者が、五、六人にもなつた。

また子どもたちがたも木に登るとさらけ落ちて足の首を折つてしまふ。

人々は蛇の仕業だと恐れ、近寄ることさえ肌寒い思ひをした。けれども作場道もあることだし、そこを通らないわけにいかない。恐れているだけでは困るので、付近の人々が相談して蛇の祠（ほこら）を建て、白龍大神と名づけ、崇敬することにした。

それからはだれも蛇の姿を見たものがなく、たも木に登つてもさらけ落ちる子はなくなつた。

白竜さま (その二) (四谷)

義経主従が薄氷を踏む思いで北国に下る。

米山峠を根城にする山賊亀割太郎は大勢の手下を従えて、義経の一行をからめ捕って、鎌倉の恩賞を得ようとしたが、義経の妻が身代りになって義経を逃がした。亀割太郎は大変怒って、大勢の手下と共に急追した。

義経一行は鏡の湖まで来たが渡る舟がない。後ろからは盗賊どもが追いかけてくる。義経は八百万（やおよろず）の神々にわれに利生をお与えくださいと祈り続けると、その昔、ウガヤフキアイズノミコトが鏡の湖の守りとして放された白龍が姿をあらわして、源家の御曹よ、わが背に乗り給え、と義経一行を背に乗せて対岸まで渡してくれた。そのおかげで義経主従は越の砂浜づたいに吉井の方へ逃げのびることができた。

村人は白龍の靈験におそれて、義経主従着岸の所に白龍の小祠を建て、駒つなぎをした若木を神木とした。

鼠塘のそばの白龍さまがそれである。

団子山（その一）

この辺一帯をぐみ山と呼ぶほど、往昔ぐみの木が多かったが、付近の田地へ砂が吹き込むので、陣屋に検分を乞い、安永六年出雲崎代官風祭甚三郎の時、善根すで長さ三百十六間を囲い、刈羽村よりの小松を移植した。これは、これまで再三願い出ても役所が動かないため、三年前、われわれは村を捨てて、このぐみ山下へ全村移住するつもりだ。砂かぶりになっても見殺しにするのかと、代官をおどすといういきさつがあったからだ。

砂囲いが出来たころ、柏崎納屋町でダンゴ、ダンゴと呼ばれていた品田彌三吉がここへ移住してきて、新田をおこしたので団子山と呼ばれるようになった。

また、この山が新田畑、比角のどちらに属すかということがあいまいであり、どちらも自村の所有を主張しておさまらないので、代官風祭甚三郎のとりなしで、新田畑、比角の二村から代表の力士を出し、相撲の勝負によって勝者の村へ付地することにした。結果は新田畑の力士が勝ち、それから新田畑地内ときまつた。

団子山（その二）

昔の団子山は砂かぶりの山と呼ばれて、村人にとっては厄介物であった。ぐみが茂っていてぐみ山とも呼ばれたが、砂ばかりの丘では作物はできず、砂が付近の畑へ飛び散って、作物を埋めてしまうので人々は困り果てていた。

この山の両側にある比角村でも新田畑村でも、この山を迷惑がって相手の村へ押しつけようとする。いつの寄合い相談も「俺たちのものではない。お前たちの土地だ」となすり合うだけでまとまらない。毎年のように、この争いが続いていた。

ある年、比角村の老人が闇の夜に、ひそかに人夫を使って比角側の畑ぞいに木炭を埋めておいた。そして、この年の寄合いが始まった時「昔、村境いの争いが起きた時、後のために木炭を埋めたものだということから、掘ってみようではないか」と提案、早速、両村立合いで掘ったところ、比角の計画通りに木炭が出てきて、何も知らな

い新田畑村が、この山を引き取ることになった。

団子山（その三）

牛池

団子山の西北端（もと短期大学跡地）に池があった。佐渡から渡って来た牛方が、ここでひと休み、持ってきた数頭の佐渡牛に水を飲ませる池にしていた。牛池の名で呼ばれるようになった。

この牛池のあたり、人家はなくても一時の宿には住みやすかったのか、毎年春、大鯛のとれるころになると信州から乞食がやって来て小屋掛けをして住み、地中に穴を掘り、その中へ油紙を敷きこみ、湯をぶちまけて行水を使ったものだという。

団子山（その四）

狐の嫁入り

明治の始め団子山の北端に狐が住んでいた。人々はお三狐と呼んでいた。おとなしい狐で、人が意地悪をしたり、おどかしたりしない限り、人を化かすようなことはなかった。近くに住んでいた日本画の先生と気が合い、その床下を自分の住みかとすることもあった。その日は晴れていたのに、夕方近くからショボショボ雨が降り続いて、とつぶり暮れたころ「狐の嫁入りだぞ」の声に人々が外へ出て見ると、一列にならんだ嫁入り提灯の火が、団子山から新田畑沖

を通って田塚山の方へ進んで行く。お三狐が田塚山の狐へ嫁入りする行列の火だ。ボカボカしながら静かにフワリフワリと並んで行く。「あんまり見ていると田塚の狐がヤキモチを焼いて盲にするぞ」といい合いながら人々はあわてて家の中へもどって、雨戸をしつかりとたてた。

見隆坊の天神像

柏崎には、一月二十五日 天神祭と称して学問の神天神様の盛大な祭りをし、正月申お祭りした天神様を、御納めする。

各家庭でも行なわれるが、各社寺でも天神祭りがこの日行なわれ、特に比角の見隆坊のそれは盛大であった。

見隆坊の天神は、雲東天満宮で 菅公の自作といわれ、もと京都知恩院にあったものだが天満宮の夢のお告げで、見隆坊にまつられたものと伝いられている。

雀森の鬼

雀森は比角村の東端、鏡日吉神社のある古松の茂っている森である。

昔、ここに鬼が住んでいた。毎夜ここを通る人があると、樹上から腕を伸ばしてグイとつまみあげておどかすので、夜になるとだれも通るものがない。

こわい鬼のいたずらも村人の力ではどうすることもできない。鬼退治はお武家さんに頼むよりないと、お士の通りかかるのを毎日のように待っていた。

ある日、通りかかるお士の姿を見かけたので、村の人たちは早速「万民の難儀を助けてください」とお願いした。武士は即座に承知して、その夜もふけると、雀森の松の樹の下へと歩いて行った。鬼は松上におって、長い腕を伸ばして武士の頭をつまんで引っぱり上げた。武士は少しもあわてず、左手で鬼の手首をつかみ、右手で腰の刀を抜きざま鬼の腕を切ったので鬼は悲鳴をあげてどこにもなく逃げ去った。

それから、どのような夜ここを通っても危害を加えるものはなかった。

力持ちの鬼政

昔、比角に鬼政という人があった。この家は代々政右エ門というのだが、人並以上に力があり、剛毅な男なのでだれいうとなく鬼政でとおるようになった。

ある日、馬を引いて八石山へ秣（まぐさ）刈りに出かけた。その帰途、運悪く鯖石川の架橋工事が始まって、馬の往来止めとなってしまう。困った鬼政に「何度でも荷を分けて、かついで渡らっしゃい。そのうちに日も暮れようし、馬ものたれ死ぬだろう。」とからかう人足どもに「荷をかついで渡る分には差支えないのだな」と鬼政は馬の背に秣を山と積んだまま馬の足を両手にかかえてかつぎ

あげ、そのまま渡ってしまった。声もなく驚く人足どもに「俺と同じような者がいま一人おれば、八石山の頂上に境界杭を打って比角の地所にしてしまうぞ」と大声をはなつて、人足たちのどぎもを抜いてしまった。

その後、比角と春日と境界争いが起きた時、鬼政は境界の線より遙か百間もへだてた春日地へ境界の杭を打つべきだと主張して譲らない。役人と春日の村民は聞きいれないで杭を打とうとする。鬼政はそこへ大の字なりに寝て「打つなら、俺の胴腹とも打つてしまえ」とがんばり「それほどわからんなら、昔の人は境界に木炭を伏せておいたというから、俺のいうところを掘って見たらどうだ」と主張するので、掘ってみたら、その通りに細長く木炭がずうっと埋められていた。こうはつきりしては仕方がない。境界は鬼政のいう通りに決った。

この木炭を埋めたのは、鬼政が前もって計画していたのだといううわさがその後だれいうとなく流れた。

稲荷さんは松がきらい

昔は悪田と荒浜新田との境界があいまいで、しばしば争いごとになった。

それで境界に松を植えて区別していたところが、悪田の稲荷さんが胡麻（ごま）の油ですべてころげ、松の葉で目を突いてしまった。大へんお怒りになって「自分の鎮守する悪田には松の木と胡麻は植えさせない」ことにされた。

それからは境界の松の木が枯れてしまった。新しく植えても枯れてしまう。これは稲荷さんの恨みから松が枯れるのだと、村の人たちは話し合いながら、松を植えることをあきらめることにした。

松の代りに境界は鱒石川の流れを境界にすることにした。川尻と
いうのはその年、その年で変わる。風の具合、波の具合、出水の具合で始終変化する。ある時は広くなり、ある時は狭くなったりで、
村人たちはほとほと困りながらも、どうすることもできない川の變化にまかせざるばかりだった。

渡し守のまじない

昔、悪田の渡し守は夕顔と胡麻(ごま)を畑に作らなかつた。これは河童(かっぱ)がきらうものであつたから、渡し船に乗る人の安全を祈ることから始まつたという。

比角地名考

比角 昔は日隅・日栖とも書いた。

延歴年中 坂上田村麿は、日隅の県に 大巳尊(天日隅という)
建南方命(御穂須々美命とも言う)の二神をお祠りして 日栖宮
と言つた。

四ッ谷 四屋・四家とも書き 延徳年間開村の頃は人家四戸であつ

た。

悪田 地味悪い所に部落を作つたので その労苦を偲ぶためのもの
か。

養蚕町 養蚕を主とした町 現大和町

だんご山 現新田畑 荒地地砂丘であつたのを 柏崎納屋町品田瀬
三吉 屋号「だんご」が新田畑を起してからだんご山と呼ばれる
ようになった。

挽木町 四ッ谷二丁目 低き町の意か

ねずみ塘 不寝見塘 寝ずに水番をするーという説もある 現在鼠
塘と書く

安田屋小路 本町八丁目と四ッ谷の境の小路で 東側角に安田屋と
いう呉服屋あり。四ッ谷本通りより北入する

蔵小路 本通りより北入し 古見野御蔵に通ずる道路。善光寺別院
が建てられてから、善光寺大門とも呼ばれた。

停車場通り 現在羽森神社参道の西側のせまい農道。

おんぼや小路 今の比角駅東口通り この小路の奥 今の比角小学

校給食堂辺に 火葬場があったのでこの名がある。比角小学校が
現在地にできてからは 学校小路と呼ばれる。

みのや小路 みの屋というせともの屋があった。後女学校ができて
から「女学校大門」と呼ばれた。

吉浦通り 現四谷一・二丁目の境の小路 吉浦氏（金物店）の努力
によって出来た小路。

桃山町通り 昭和初期までは狭い小路で いろいろな称呼があった。

田塚屋小路 初期人家は田塚屋・半田屋・内山の三軒しかなかつ
た。

おんぼや小路・そうれい場小路 小路の奥に火葬場があった。又
火葬場を管理していた孫市という人の住家があったので 孫市
小路とも呼ばれていた。

おんぼや小路 四谷三丁目と長浜町の境の小路 奥に長浜村の火葬
場があった。

下町（南側）の小路

塘の小路 越後線の東側に沿って ねずみ塘に通ずる小路 現在
使用されていない。

葭原小路 中村青果店東側の通り この小路の娘が江戸吉原のオイ
ランになったので、オイラン小路とも呼ばれた。

地蔵堂小路 長寿庵と小山乾物店の間の小路 この小路の奥に地蔵
堂がある。

松之山街道 比角七区コピア美容院附近に九尺程の道路があり、本
村を通って六地藏に出た。

植木小路 四谷二丁目から二中グラウンドに通ずる小路 比角の旧家
植木氏が住んでいた。

星野さんの坂 四谷三丁目と長浜町の境の小路 嘗ては雀森・鏡日
吉神社に通じていた。東側に比角の先生星野家がある。

津出し小路 比角御蔵より年貢米を船積みする時に使われた道 今
の井比齒科医院より諏訪町をつつきり 裁判所前児童公園を通っ
て海岸に出る小路。

お歌が火（その一）

昔、比角にお歌という女がいた。この女の意中の人が枇杷島の男
なので、夜な夜な 鏡ヶ沖を通って忍んでいった。その時 このお
歌が好きで 深く想いを寄せていた男があつて、枇杷島へ毎夜通つ
ていることを知って、それを恨みに思つて、お歌が鏡ヶ沖を通ると
ころに待ち伏せして殺してしまった。

それから怪しい火が光円寺から出ては鏡ヶ沖に飛んでいく。これ

をお歌の火と言ひ伝えてゐる。

お歌が火（その二）

鏡ヶ沖に夜毎に火がもえる。行つて見ると、また先の方になつて見える。かがみが沖の歌が火という。

比角村に「お歌」と呼ぶロクロク首の女があつた。ある夜、その首を長く伸ばして往来まで出したところ、折悪しく武士が通りかかつた前だったので、妖怪なりと切りつけられ、その首が遠く鏡ヶ沖へ飛んでいってしまった。それから、その首そっくりと思わせるような陰火が、雨がしとしと降る夜になると清野塚あたりから飛んでゐる。

清野塚は行通寺の東方の田の中にあつて、明治になつても、ここから出る火を見た人があるという。

半田の池

長さ約三百メートル、横約二百メートル、高さ約二・七メートル。浜沖、岩上、半田、茨目の江水である。

明治十一年、この池から怪しい音が出た。

世間の人はこれを半田池がぼなるといひ、怪しい鳥のなき声であるうとか、螺貝（ほらがい）のぼなるのだなどと、いろいろうわさし合つた。近くの村からもききにいくものが多かつた。

甲子楼主人も星野為四郎に随つて、ききにいったことがある。あめやなど出てにぎやかであつた。しかしながら、たしかにきいたものは一人もなかつたという。

明治四十三年より此池の一部をつぶして新田とし、四十四年から作付をした。

蛇塚

蛇塚は枇杷島村字半田地内にあり、慶長年間に小字前谷内に方向寺という大きな寺があつたが、住職がいなくなつたため、廃寺となつてしまつた。どこから来たものか、この寺に大蛇がすむようになつて村人を悩まし、人々の迷惑は一方でなかつた。

ある時、名高い坊さんが来て、十七日間誦経祈禱して、封じこめたところ、蛇はどうとう死んでしまつた。そこで村民は大蛇を埋めて経石を建てしとし、蛇塚と名づけたという。

註、蛇塚の所在について「岩上」説もあり、内容は大同小異、次の通り。

岩上の蛇塚、慶長の頃、宝光寺という寺あり、境内に大蛇すくうを寺僧封鎖して経石を埋む。

半田山の鈴音

枇杷島村大字半田前谷地にある丘を城山と呼んでゐる。

戦国の頃、猪浦主計頭の居城である。上条城主彌五郎の家臣であったので、宇佐美定行に攻められ、五月五日落城した。それ以来、毎年五月五日深更になると、山から馬鈴の音を鳴らし、柏崎方面に行くという話が伝わっている。

半田六地藏

半田の六地藏といひば、この地方で有名であるが、元は六社前に安置してあったのである。

天明年間の頃に此石仏が人通りの多い所へ出たいから出してくれと、阿部市郎左エ門に夢で頼んだ。はじめは夢だと思つて省みないでいたが、毎晩同じ夢を見るので、水上という所は人の通行のはげしいからうつしてやつた。それが今の六地藏である。

半田のぞき

半田字小池にのぞきという地名がある。

昔佐藤が池に七頭の大蛇がいたとき、その頭領分であるものが、何を思ったか、自分の頭を西方の小池の丘の上に出して半田一面をながめた。

大蛇がのぞいた所であるというので、村人はのぞきといっている。

柴刀削（なたけづり）地藏

枇杷島村岩上字後刈に柴刀削り地藏を安置してある。弘法大師みづから柴刀でけずり建てたのであるという。境内はやや広いため、常に子供の遊び場である。その近所に勘右エ門といつて村でも剛力できこえていた人があつた。子どもたちが地藏さんを持ち廻つて遊ぶのを見て仏罰でも蒙つてはならぬとて、これを小丸山に奉遷した。するとその夜にわかにならぬとて、そこで山伏から占つてもらつたところ、地藏さんが子どもと遊んでいたのに山へうつし、遊びの邪魔をした罰だ、早くもとのところへもどせば其の熱はさがるといつたので、翌日早々に山から元のところへもどしたところ、病気はすぐになおつたという。これ以来、この地藏の功德は世に現われたという。

註1. 勘右エ門とは村田才一郎の祖父と伝えられている。（大正十二年）

註2. 小丸山に安置してあつた、佐渡より渡来のお観音像ととりかえた。という説もある。

註3. 山伏の名は玉宝院という。

註4. 安政五年三月二十四日に岩上の若者がそうだんして、柏崎町

新屋敷新田、石工、高木某にたのんで一大石像（観音像）を
刻み建て、地藏尊はその下に埋めたという。

以上註1より4まで、関矢貞著作 枇杷島村郷土誌の記事中
より。

天神御洗井

枇杷島村大字半田前谷地に天神の御洗井という、まわり三メー
トル、深さ約五メートルの井戸が一つある。水質がよくて、夏、炎熱
の際、他の井戸がかれても、この井戸水だけはかれないので、近所
の者はくんで飲用水としていた。

もし、けがれのある家の者がくむと、にごって飲むことができな
くなる。昔、その丘の上に菅原天神を祀った祠があって、境内は樹
木がしげり、ひるも暗い程であった。天神様に詣でる人は必ずこの
井戸水で口をすすぎ、手を洗うならわしになっていた。

まことに尊ばれた井戸であったが、明治末年頃になって、祠を六
社境内にうつし、境内の樹木を伐りはらってしまった。それで今で
は水量もややへり、又不浄の家でくんでも濁らなくなったという。
註、昭和二年八月、校舎増築のため埋めたり。

半田の川向い

— 村田家の家号 —

枇杷島村で「半田の川向い」といえばこの地方での資産家である。

先祖は天正年間聞光寺主が戦乱を避けて柏崎に下向する際、お伴
をした寺侍で、半田は柏崎に近いのでここに居を定め、農業のかた
わら、子弟に文学を教え寺主に仕えた。

ずい分旧家である。姓を村田といい、綽名を川向いと唱いるわけ
は、もと鱒石川は安田から佐藤池新田を経て半田に入り、湾流して
長浜に至ったものである。三ッ屋や佐藤池新田地域を調査してみ
ると、鱒石川の流れたあとがある。その鱒石川の向うにある大家であ
るからというので、川向い様と呼びならしたが、とうとうあだ名
となって今日に至ったものであるという。

